

令和二年度

## 入学試験問題

# 国語

### 注意

- ・問題は十二ページにわたって印刷してあります。
- ・試験時間は五〇分です。
- ・声を出して読むではいけません。
- ・答えは、問題の指示に従って、解答欄の決められた場所に濃く、はっきりと書きなさい。
- ・答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- ・字数指定のある問いはすべて、句読点・記号も一字と数えるものとします。
- ・答えはすべて別紙解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。

法  
学  
入  
校

東洋大学

東洋大学京北高等学校

1

次の問いに答えなさい。

問一 傍線部のひらがなを漢字で書きなさい。

- (1) 海辺でかいがらを拾う。
- (2) 道路がじゅうたいして車が進まない。
- (3) 公園は付近の住民のいこいの場となっている。
- (4) 昔の写真を見てなつかしい気持ちになる。
- (5) 仕事に対してどんよくな姿勢を見せる。

問二 次の文章の傍線部①～⑤の活用語の活用形をア～カからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

よく、「勉強する意味などどこにもない」とか「頑張ればいいことがある」というのは間違いだという人がいるが、私はそうは思わない。だれもが幸せになりたい、豊かとは言わないまでも、それなりの生活をして生きていきたい、そう願っているはずだ。だとしたら、努力する意味はそこに間違いなくある。頑張って報われないこともあるだろう。でもそれが人生のすべてだろうか。報われないなら頑張らないというのはあまりにも現実的すぎやしないだろうか。とにかく自分の可能性を広げるために勉強や努力をする。そういうひたむきな姿勢を持つてこそ、人は幸せに向かっているのではないだろうか。

ア 未然形    イ 連用形    ウ 終止形    エ 連体形    オ 仮定形    カ 命令形

問三 傍線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直しなさい。

- (1) 月見れば世間心細くあはれに侍り。なんでふものをか嘆き侍るべき。
- (2) 日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。
- (3) 頭はあまそぎなるちこの、目に髪のおほへるをかきはやらで、
- (4) 富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花のこずゑまたいつかはとこころほそし。

問四 傍線部の古語の意味としてもっとも適切なものをア～エから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (1) 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、  
 ア 夜明け      イ 日中      ウ 夕暮れ      エ 深夜
- (2) 三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。  
 ア ちよこんと      イ 堂々と      ウ とても      エ 少し
- (3) 年ごろ申し承つてのち、おろかならぬ御事の思いまゐらせ候へども、  
 ア 毎年      イ 一人前の年齢      ウ つい最近      エ 長年の間

問五 次の作品の作者名をア～エから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (1) 『源氏物語』  
 ア 紀貫之      イ 紫式部      ウ 清少納言      エ 兼好法師
- (2) 『蜘蛛の糸』  
 ア 夏目漱石      イ 川端康成      ウ 太宰治      エ 芥川龍之介

問六 次の熟語の構成として適切なものをア～カからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) 擬似      (2) 還暦      (3) 懇談
- ア 同じような意味の漢字を重ねたもの  
 イ 反対または対応の意味を表す漢字を重ねたもの  
 ウ 上の字が下の字を修飾しているもの  
 エ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの  
 オ 主語・述語の関係にあるもの  
 カ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

問七 次の漢文を書き下し文にしなさい。

低<sup>レ</sup>頭<sup>ヲ</sup> 思<sup>フ</sup> 故<sup>ニ</sup> 郷<sup>ヲ</sup>。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

バレンタインデーを直前に控えた金曜日。

約ひと月もの間、悶々<sup>もんもん</sup>として待ち続けた「写真世界」の掲載誌がポストに届いていた。それを見つけたぼくは、取るものも取りあえず部屋に駆け込んで、家具調こたつに正座をし、丁寧<sup>ていねい</sup>に封筒を開け、そして震える指で雑誌のページを開いた。

① 作品は、巻頭特集の見開きにデーンと大きく掲載されていた。しかも、世界的に著名な風景写真家のひとりで、ぼくの憧れの人でもある武内芳信<sup>たけのぶ</sup>氏が選考委員長になっていて、その評がまた、ぼくを舞い上がらせた。

《この組み写真<sup>\*1</sup>は、一点の迷いもなく最優秀賞に選ばせてもらった作品である。一見して作者の撮影技術が確かなものであることは疑うべくもないが、それよりも一枚一枚の写真に、見えないはずの「音」や「匂い」までが写り込んでいるところが珠玉なのだ。単なる二次元の画像が、三次元以上の情報をもって語りかけてくるのである。きっとこの作者は、撮影ポイントや被写体となった人たちを、ファインダーを通してしみじみ慈<sup>いつく</sup>むような目で眺めていたに違いない。心にあふれた新鮮な感動を、そのまま写真という二次元に封じ込めることに成功した秀作である。アマチュアのレベルを遥<sup>はる</sup>かに凌駕<sup>りょうが</sup>したこの作者の今後に期待したいところだ》

夏美<sup>なつみ</sup>がぼくの家に来るまでの間、何度も、何度も、この評を読み返しては、ひとりでにやしてしまった。

二月中旬にバイクで長距離を走ると、身体が凍りそうになるし、山里ではふいに雪が降るかも知れないので、ぼくのワゴンRで「たけ屋」に向かった。

途中、車のなかで夏美は、届いたばかりの「写真世界」のページを何度も開いては、「やったねえ、慎吾<sup>しんご</sup>ちゃん」とか「わたしは信じてたからね」とか「そもそも、才能があったんだよ」とか「早くヤスばあちゃんと地藏さんに報告して、喜ばせたいね」などと、くすぐったくなるような台詞<sup>せりふ</sup>を連発<sup>れんぱつ</sup>していた。

ステアリングを握ったぼくは、だらしなく緩みそうになる頬<sup>ほお</sup>の筋肉を緊張させておくのがひと苦労だった。

「たけ屋」に到着したのは、真冬の太陽が西の山の向こうへと、まさに沈みかけた頃だった。

いつもの空き地に車を停<sup>と</sup>めて、店のなかに入っていくと、今日もやっぱりレジは無人で、ヤスばあちゃんは居間のこたつにひとりで入って、

A

テレビを眺めていた。

「ヤスばあちゃん、こんにちば」

レジの後ろの上がり框<sup>がまち</sup>で靴を脱ぎ、ぼくらは居間<sup>いま</sup>に上がった。

「おやおや、もう着いたのかい。今日は早かったねえ」

ぼくらの顔を見たおたんに、ヤスばあちゃんの表情が

B

明るくなった。

「早く来たのにはね、理由があるの。ヤスバあちゃん、ちょっと、コレ見てよ」  
夏美が「ジャーン」と言って「写真世界」の巻頭ページをこたつの上で開いた。

「ん、雑誌かい？ どれどれ……どっこいしょ」  
ヤスバあちゃんがこたつに身を乗り出して、開いたページを覗き込んだ。  
そして――。

「い、いやあ。これは、これは……」

小さな目を皿のようにしたヤスバあちゃんが、ぼくを見上げた。

「慎吾くん、これはすごいよう。ばあちゃん、びっくりして、心臓が止まっちゃうかと思っ  
たよう」

照れくさくて、ぼくは「えへへ」と笑ってしまった。そして、あらためて **C** 正  
座をして、ヤスバあちゃんを正視した。

「こんな賞をもらったのも、この家の離れに泊まらせてくれたヤスバあちゃんと地蔵さん  
のおかげです。ほんと、ありがとうございました」

言って、ぺこりと頭を下げた。

「そんなこたあねえよう。慎吾くんの写真は最初から上手だったんだよう」

「慎吾ちゃん、地蔵さんにも報告しないと」

「うん。ヤスバあちゃん、お線香をあげさせてくださいね」

「こりゃあ、恵三<sup>②</sup>も喜んでくれるよう……」

ぼくらは三人そろって仏壇に線香をあげ、雑誌を供えて両手を合わせた。

地蔵さん、おかげさまで、ぼくの未来が少し開けた気がします。本当に、どうもありがと  
うございました――。

胸のなかで、心からのお礼を伝えた。

仏壇の脇に飾られた遺影は、相変わらず子供みたいな無垢な微笑みでぼくを見つけてい  
た。

その日の晩ご飯は、ぼくと夏美でカレーを作ることにしていた。食材はすでに来る途中に  
買いそろえてあった。

「ヤスバあちゃんはさ、たまにはこたつでテレビでも観て、のんびり休んでよ」

台所に立とうとするヤスバあちゃんを、夏美は居間に連れ戻そうとしたのだが、ヤスバあ  
ちゃんがどうしても包丁を放さないの、結局は三人で作ることになった。

考えてみれば――、ヤスバあちゃんは、ひとりでご飯が出来るのを待っているよりも、三  
人でおしゃべりをしながら一緒に料理をした方が嬉しいのだろう。

調理をはじめから少し経って、食材を取ろうと何気なく冷蔵庫を開いたとき、ぼくは少  
し気分が **D** してしまった。冷蔵庫のなか、ほとんど空っぽだったのだ。

地蔵さんがいなくなつてから、ヤスバあちゃんは台所に立つのが億劫になつてしまったの  
だろう。料理は、誰かに食べてもらえるからこそ、一生懸命になつて作れるものだ。自分ひ

とりだったなら、適当なもので済ませてしまいたくなる。一人暮らしのぼくには、その気持ちがよく分かる。

このところ、みるみるヤスバあちゃんが縮んでいくように見えたのは、気分的に落ち込んでいたせいもあるだろうけど、現実的に食べ物をあまり口にしていなかったのだ。これからは、今日のカレーのように作り置きのできる食べ物を多めに料理するか持参して、何気なく冷蔵庫に残していくのがいいだろう——ジャガイモの皮を剥きながら、ぼくはそんなことを考えていた。

一方、女性陣はというと、のんきに集落の人たちの噂話に花を咲かせていた。

「雲月さんはよう、四十九日が済んでからも、毎日のようにお線香をあげにきてくれるんだよう」

「あの人、やっぱり、いい人なんだね」

「そうだよ。恵三が死んだのを、この集落でいちばん悲しんでくれてるのは、雲月さんかも知んねえよう」

「雲月さんが引越してきたとき、地藏さんが面倒みてあげたんだってね。お葬式の日、雲月さんが言ってたよ」

「あの人はよう、本当に不器用な人だから、恵三も放っておけなかったんだよう」

「ああいう可愛い人って、放っておけないよね、やっぱり」

「そうだよねえ」

ヤスバあちゃんまでが、あの雲月を、可愛い、と思うのか——。ぼくはひたすらジャガイモの皮を剥きながら、母性本能という言葉の意味を考えさせられるのだった。

「そういえば、ヤスバあちゃんさ、公英さんとは、その後どうなの？」

夏美が話題を変えると、ヤスバあちゃんの目に静かな光が宿った。

「あの子は優しい子でよう、四十九日の後も、おばあちゃん元気かいつて、時々、電話をくれるんだよう……」

「そっかあ……。ヤスバあちゃん、よかったねえ」

「ほんとによう」

ヤスバあちゃんはそのとき、ニンジンを切っていた手を止めて、深いため息をついた。目を細めて微笑んでいたから、それは幸せのため息なのだと分かった。

「身体の利かねえ息子をちゃんど看取って、この歳になって孫と仲良くなれて……。ばあちゃん、もう、なーんも思い残すこともねえよう。これも、みーんな、慎吾くんと夏美ちゃんが家に来てくれたおかげだよ。本当にありがとねえ……」

ぼくは夏美と顔を見合わせた。

「ちよつと、ヤスバあちゃん、<sup>③</sup>そういうのやめてよ」

「お礼つてのは、言えるときに言っておかねえとよう」

「そうじゃなくてさ、思い残すことがないとか、そういうのやめようよ。なんか、しんみり

しちゃうよ……」

ぼくもジャガイモの皮を剥く手を止めて、夏美の横で頷いた。  
すると、ヤスバあちゃんは、E 笑ったのだった。

「そんなに心配しなくっても大丈夫だよ。まだ、ばあちゃんは死なねえからあ。思い残すことがねえつてのは、ばあちゃんがいま幸せだって意味で言っただけだよ」

「なら、いいんだけどさ」

「そのうち、公英がまた遊びに来てくれるんだつてよう。しかも、家に泊まりに来てくれるつて……。そんな楽しみが待つてんのに、まだ死ねねえよう」

「ええっ、公英さん、泊まりにくるんだ」

「あの子は優しい子だからよう」

「よかったですね」

ヤスバあちゃんは「うん」と、④ 少女みたいに微笑んだ。

台所の空気が明るくなると、止まっていた三人の手が動きはじめた。

やがて「たけ屋」の古びた台所は、カレーの香ばしい匂いと、いつもの愉たのしい雰囲気ですたされていった。

(『夏美のホタル』森沢明夫・株式会社 KADOKAWA)

\*1 組み写真：何枚もの写真を、一つのテーマで構成し、編集したもの。

問一 傍線部①「作品は、巻頭特集の見開きにデーンと大きく掲載されていた」とありますが、

その作品の説明として適切なものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏美と春の風景を組み合わせた写真であり、自然豊かな田舎の風景と桜の花の美しさが際立っている幻想的な一枚である。

イ 暮れ方に沢で蛍の群れを撮った一枚であり、夏美とその周囲を乱舞する蛍の光跡の取り合わせが神々しく美しい写真である。

ウ 「たけ屋」から見える風景を撮った写真であり、一年間を通じて四季折々の花々や吹き抜ける風の様子を描写したものである。

エ その地域に住み込み、地域の人と生活を共にしつつ撮影した写真であり、何気ない日常の中にある人々の営みや心情を描いたものである。

問二 空欄 A～E に入る言葉を、ア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア パツと    イ 鬱うつ々と    ウ ぼんやりと    エ あっけらかんと    オ きちんと

問三 傍線部②「恵三」とありますが、この人物について、(1)・(2)の問いに答えなさい。

- (1) 恵三さんはその人柄や様子から「地藏さん」とも呼ばれていました。そのように呼ばれていた理由が読み取れる一文を抜きだし、最初の五字を答えなさい。(会話文はふくまない)

- (2) ヤスばあちゃんにとって恵三さんはどのような間柄にあたりますか、適切なものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 叔父      イ 実父      ウ 配偶者      エ 息子

問四 傍線部③「そういうのやめてよ」とありますが、その言葉を発した理由として適切なものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それまで気安く話していたヤスばあちゃんから、突然あらたまって丁寧に敬礼を言われたため、気恥ずかしくなってしまったから。

- イ 三人でカレーを楽しく作っていたところ、急にまじめな内容をヤスばあちゃんが話してきたため雰囲気合わないと思ったから。

- ウ ヤスばあちゃんが「慎吾くんと夏美ちゃんが家に来てくれたおかげ」と言ってくれたものの、実際にはそんなことはないと思ったから。

- エ ヤスばあちゃんが「思い残すこともねえよう」と口にしたため、生きる気力がなくなつたように感じられて縁起でもないと思ったから。

問五 傍線部④「少女みたいに微笑んだ」とありますが、このときのヤスばあちゃんの様子を説明したものとして適切なものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 悲しいこともあったが、自分のことを気にかけてくれる人や、自分の話に耳を傾けてくれる人の存在を意識し、素直にその喜びを受けとめている。

- イ 苦しいことも悲しいこともたくさんあった人生であるが、それをさとられないよう、相手に合わせて取りつくるおうとしている。

- ウ 「ぼく」や「夏美」というよい話し相手を得て、様々なことがあった自分の半生を話すことができ、うれしさのあまりあふれる喜びを隠せないでいる。

- エ おだやかな日々ではなかったが、今こうして老境に達して、決して不幸ではなかったと静かに人生の終わりを受けとめようとしている。



次の文章を読んで、問いに答えなさい。

教育における数学の重要性を主張し、特にそれまで大学では教えられていなかった代数学（現代では方程式でおなじみ）を教えることに熱心であったのは、意外なことにキリスト教カトリックの修道会であるイエズス会の学校でした。日本で有名なフランシスコ・ザビエルなど、東洋に訪れた宣教師の多くが所属した組織です。

イエズス会の修道士たちは、布教をするだけでなく、学校も作ることで地域に浸透を図りました。特に西ヨーロッパではそれらの学校が貴族の若い男性の中等教育の場となりました。「我思う、ゆえに我有り」で有名な哲学者のルネ・デカルトもイエズス会の学校で数学に出会っています。ただし、最先端の数学研究となるとイエズス会の学校で発表の場があるわけではありませんでした。天文学の教育においても、地動説は扱われませんでした。

自然哲学、すなわち今でいう物理や化学、生物学など、実験・観察を伴う自然科学分野全体を学べる学校はなかなか作られませんでした。そういった分野には錬金術や職人階層の技術など、当時の大学からは文化的に遠い要素が沢山入り込んでいたからです。自然科学はもっぱら独学で習得し、同好の士で集まって楽しむものでした。

大学だけでは不十分というのは、自然科学だけではなく、他の分野でも同じでした。ルネサンス期から一七世紀前半にかけては、人文主義の伝統のもと、特にイタリアなどを中心に新しい学問や文芸、芸術が花開いた時代です。この時代に、中東世界に伝わっていた古代ギリシア、ローマの学術的遺産や、イスラム文化圏の書物が多く伝えられたのですが、その解読や翻訳、研究などの営みは、大学ではなく、様々な規模の私的な同好会で盛んに行われることになりました。

こうした同好会は「アカデミー」（もしくはソサエティ）などの語で呼ばれました。たとえばガリレオも実験や自然観察を愛好する人々によるアカデミア・デイ・リンチェイ（山猫アカデミー）に加わっています。

既に一二世紀頃にも、イスラム文化圏を経由した古典や学問の輸入はなされていたのですが、一五―一六世紀に起きた文芸復興に特徴的だったのは、教養ある豊かになった商人層が台頭し、かつ印刷術の発展といった要素に助けられて、知的な活動が教会と大学を超えた場所で開催するようになっていたことでした。一二世紀の段階では「教会の外」に大学という学問のコミュニティができたことが重要だったわけですが、今度は「教会と大学の外」に、更に自由な文化が広がったわけです。

当初、私的なアカデミー会合は社交と研究の入り交じったスタイルのものでした。集まって学問談議をした後、音楽を奏でながら晩餐会ばんさんなどをするのが一般的であったようです。内容によっては女性が参加することもありました。

また、人々には文系・理系を区別する感覚は依然としてありませんでした。なので、俗語

で書かれた詩作を楽しんだり、音楽や絵画を嗜たしなんだりするのと同じくらい、古代ギリシア語、あるいはアラビア語の自然学・医学書の翻訳や、それに基づく自然観察などを楽しんでいます。

また、全人格教育を掲げたルネサンス期の理想が生きており、人々はなるべく多くの分野を知るのがよしとされてきました。そのため、数学と音楽、詩が同居するような会合まれも稀ではありませんでした。

現代の感覚からすると不思議かもしれませんが、当時の人たちは別に無理をしていたわけではありません。彼らにとっては全てがつながっていたのです。

まず、古代文明にならって、生き生きとした人間精神を、ラテン語ではなく自分の母語で表現するため、俗語を詩や表現の言語に磨き上げたいという気持ちがありました。また、当時の文学的な読み物は基本的に詩であり、詩は音楽や演劇と近い関係にありました。更に、東方から伝わった書物にはあらゆる分野（哲学、詩、錬金術書、数学、自然学など）がありました。言葉を磨くこと、食事と音楽を楽しむこと、様々な知識について談議すること、これらが自然な連関をなしていたのです。

しかし、そうしたアカデミー会合の一部が有力な王侯貴族の庇護ひごを得るようになると、社交とアカデミー活動とが分離していきます。

最初期に王権によって制度化され、現代にも続く有名なものは言語を扱うフランスのアカデミー・フランセーズ（一六三五）です。一七世紀半ばになると、自然科学的な実験や数学を取り入れたアカデミーが各地に誕生していきました。一六六二年に英国のロンドンにロイヤル・ソサエティが、一六六六年にはフランスのパリ王立科学アカデミーが成立しています。一八世紀になると欧州全土で二〇〇以上のアカデミー（またはソサエティ）が作られました。現代ではノーベル賞で有名なスウェーデン王立科学アカデミーもその時期に作られたものの一つです。

大学と異なり、アカデミーでは基本的に自国の言葉か、または当時国際語としての地位を高めつつあったフランス語と自国語など、複数の言語で活動が行われました。ルネサンス期に根付いた伝統の影響が窺うかがえます。

アカデミーの活動自体は、学会のようなものでした。ただし、パリやベルリン、サンクト・ペテルブルクなど、王権のイニシアチブが強かった一部の王立アカデミーは会員に収入を与え、一生を研究だけして暮らせるような立場を保障していました。それまでも、軍事技術者や貴族の家庭教師、王様のお抱えの学者といった立場で給与を得ながら自然科学や数学の研究をすることはありましたが、特定の雇用主の意向を気にすることなく、研究することだけで組織に属し、生計を立てる道が開けたのはこの時が初めてだったようです。

自然科学だけを扱っていたパリ王立科学アカデミーなど一部の組織をのぞき、大半のアカデミーでは自然科学と言語・文芸・歴史など文系の学問が一緒に扱われていました。しか

し、アカデミーが制度化されたことは、ゆるやかながらも少しずつ専門分化の方向をもたらしました。特に自然科学においては、この時期を通じて現代の科学者に通じるものと考え、行動様式が固まっていたといわれます。影響力があつたと思われるのは、ニュートンが所属したロイヤル・ソサエティと、その仕事を高度な数学で表現することに成功し、科学の近代化を進めたパリ王立科学アカデミーです。

ロイヤル・ソサエティは科学の専門学会誌の先駆けとなる『フィロソフィカル・トランザクション』を出版しました。また、平民の出でありながら科学研究の名声により貴族となり、死去の際には国葬までなされたニュートンは科学者の模範としてヨーロッパ中に知れ渡りました。

一八世紀以降に発展したパリ王立科学アカデミーは、科学の研究論文が出版されるスタイルを近代的なものにしました。論文がジャーナルに載るには査読を受けるといふ仕組みを作り、<sup>②</sup>科学の議論に宗教の話を混ぜてはいけないという決まりを最初に定着させたのはこのアカデミーです。たとえばその会員の一人であつたピエール・シモン・ラプラスは、天体力学の研究について「神という仮説は必要ではない」と述べたことで有名です。

宗教の話が突然出てきてびっくりした方もいるかもしれませんが、一七世紀までの科学研究者はむしろ、自然界の謎について行き詰まつたとき、<sup>③</sup>神の存在に触れることが普通だったので。当時は、自然現象を探求すること自体が決して宗教とかけ離れた行為ではなく、むしろ神の創つたこの宇宙についてより良く知るために必要な営みでした。それゆえ、分からないことが起きたら神の問題に立ち戻るのは必然的であつたのです。

一七世紀後半の時点では、説明がつかない自然現象に出会つたときの反応は大まかに次の二つに分かれていました。一つは、神がこの宇宙を数学で説明可能な形に創つたはずだと信じて、自然観測のための精度を上げつつ、その結果を記述する数学の発展に尽くそうとする立場です。この考え方だと宇宙は精巧な機械細工のようなイメージのものとなります。神とその機械を創つた技師のような存在というわけです。

もう一つは、神の意図は人間には計り知れないとした上で数学による完全な記述を諦める立場です。意外かもしれませんが、一七世紀においては優れた数学者としても知られたブレイズ・パスカルや、ニュートンはこの立場に立っていました。

パスカルは晩年、ジャンセニスムという異端視されたカトリック・キリスト教の宗派に身を捧げ、神の偉大さに比較して、数学で理解できることは少ないとの認識を示しています。ニュートンもやはり敬虔なキリスト教徒（それも三位一体を否定する異端的立場）で、この世には神の調整が常に働いているが数学で説明できるのはその一部であるなどとしています。

このように当時のヨーロッパにおいては科学の探求と宗教が深くつながっていたのですが、それにもかかわらず、パリ王立科学アカデミーの学者たちが宗教の話や論文の中に紛れ込ませなくなったのは、政治的な背景がありました。当時のフランスは宗教に関して言論の自由がなく、検閲が厳しかったのです。

そして皮肉なことにこのような体制は、先に述べた二つの世界観のうち「機械細工としての宇宙」モデルと比較的相性の良いものでした。神が優れた技師であればあるほど、宇宙は機械としての完成度が高く、一度動き出せばもはや修理工を必要としないはず。この前提のもと、学者たちは神という「仮説」を省略し、「機械細工」の解明とその記述にいそしむことができるようになったのです。

（『文系と理系はなぜ分かれたのか』隠岐さや香 星海社 星海新書）

問一 傍線部①について、「大学ではなく」「私的な同好会で盛んに」なるためにはどのような要素が必要になりますか。ア～キから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 数学による普遍的学問が可能だという認識
- イ 印刷術の発展
- ウ 王侯貴族の理解
- エ ラテン語の読み書きをする能力
- オ 教養のある豊かな商人層の台頭
- カ 専門分化された幅広い知識
- キ 自然科学的な探求を認める教会の広がり

問二 一二世紀ごろから一七世紀ごろまでの自然科学的探求を教わる場、行う場の経緯として適切な順序をA～Dから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 知的な活動が教会・大学を超えた場所で展開されるようになる。
- イ 王侯貴族の庇護によって社交とアカデミー活動が分離する。
- ウ 教会の支配下の外に大学という学問のコミュニティが作られる。
- エ アカデミーが制度化されたことによって、専門分化の方向が生じる。

- A ア→エ→イ→ウ
- B ウ→ア→イ→エ
- C イ→エ→ア→ウ
- D エ→ウ→イ→ア

問三 傍線部②「科学の議論に宗教の話を混ぜてはいけない」について、どのような政治的背景がありましたか。そのことを示した一文の最初の五字を答えなさい。

問四 傍線部③「神の存在に触れる」とき、二つの考え方があります。それぞれを二十三字と十文字で本文中より抜き出さない。

問五 傍線部④「解明とその記述」とありますが、具体的にはどのようなことですか。「解明」と「記述」をそれぞれ十五字以上二十五字以内で説明しなさい。

**4** 「遊び」について、プラスの側面を一四〇字～一五〇字で説明しなさい。

注意事項

- ・ 解答欄の一マス目から書きなさい。
- ・ 句読点や記号が一番上のマス目に入ってもよい。
- ・ 記号も一字とする。
- ・ 漢字で書けるものは漢字で書くようにすること。

令和二年度 高校入試 第一回 国語 解答用紙

東洋大学京北高等学校

受 験 号  
番 号

氏 名

合 計

1

問一	(1)	(1)	(1)	(1)	①	(1)
問二	(2)	(2)	(2)	(2)	②	(2)
問三	(3)	(3)	(3)	(3)	③	(3)
問四	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)
問五	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)
問六	(い)	(い)	(い)	(い)	(い)	(い)
問七	(かしい)	(かしい)	(かしい)	(かしい)	(かしい)	(かしい)

1

2

問一	(1)	A
問二	(2)	B
問三	(3)	C
問四	(4)	D
問五	(5)	E

2

3

問一				
問二				
問三				
問四	記述	解明	十五字	二十三字
問五	15	15	15	23
問六	25	25	25	25

3

4

140					
150					

4

4

